

## 【日本の大学】第87回—三重大学：高度な知識で、社会のイノベーションを推進

三重大学は三重県の県庁所在地である津市上浜町に本部・キャンパスのある国立大学である。明治時代の初期に設立された師範学校にルーツを持ち、第2次大戦後の1949年に設立された。現在は人文、教育、医、工、生物資源の5学部と6大学院研究科を持つ中堅の総合大学となっている。

基本理念として、「三重から世界へ 世界から三重へ 未来を拓く地域共創大学」を標榜し、「地域に根差し、世界に誇れる教育・研究に取り組み、人と自然の調和・共生の中で、社会との共創に向けて切磋琢磨する」ことを謳っている。教育での目標としては、幅広い教養を身につけるとともに高度な専門知識や技術を有し、国際的な視野を持ち、社会のイノベーションを推進できる人材を育成している。具体的には、四つの力、即ち、社会の課題を発見し「感じる力」、情報収集してその解決法を「考える力」、コミュニケーションを駆使する「コミュニケーション力」、その課題を解決する「生きる力」を持った人材の育てていくとしている。



三翠会館。三重高等農林学校の開校10周年事業として建設された同窓会館。国指定登録有形文化財(建造物)

## 学芸、農の2学部で発足

以下、三重大大学のホームページなどから大学の現況、歴史を概観しよう。

三重大大学が新制大学として発足した時は、学芸学部と農学部の2学部体制だった。学芸学部の前身は度合県師範学校（1874年設立）と三重県師範有造学校（1875年設立）にさかのぼる。1877年に両校は合併し、三重県師範学校となった。その後何度か名称を変えたあとの三重師範学校（1943年設立）と、三重県立女子青年学校教員養成所（1938年設立）などの流れをくむ三重青年師範学校が統合する形で1949年に学芸学部として発足した。

学芸学部は1966年に教育学部に改称された。この際、小学校教員養成課程、中学校教員養成課程に加えて、養護学校教員養成課程が加わった。その後、幼稚園教員養成課程の設置（1967年）、や大学院教育学研究科（修士課程）の設置（1989年）などが続いた。1997年にはこれらの養成課程を統合改組して学校教育教員養成課程と生涯教育課程となった。1999年には人間発達科学課程が発足したが、2016年には学校教育教員養成課程の中に含まれる組織に改組されて現在に至っている。学校教育教員養成課程の中には、国語、社会科、数学などの学科別のコースや、技術・ものづくり教育コース、特別支援教育コースなど13の教育コースがある。



教育学部

## 農林、水産を統合、生物資源学部へ

農学部は1921年に発足した三重高等農林学校が源流であり、1944年に三重農林専門学校となって戦後、三重大学農学部へとつながった。農学部発足の際は、農学科、農業土木学科、林学科、農産製造学科の4学科だった。

1947年には三重水産専門学校が発足、こちらは1950年に三重県立大学水産学部となった。同水産学部は1972年に三重大学に移管されて三重大学水産学部となった。

農学部と水産学部は1987年に統合・改組されて、生物資源学部が誕生した。その翌年には生物資源学研究科修士課程（博士課程は1991年）も設置されている。

生物資源学部は、人類が生きていくうえで欠かせない多様な生物資源と、それを育む環境について、広く教育・研究する学部である。生物資源の生産と利用、その生産を支える環境の維持に貢献できる能力を身につけることを目的にしている。学科は、資源循環学科、共生環境学科、生物圏生命化学科、海洋生物資源学科の四つがあり、講義、実験などにより各分野の専門知識を修得するとともに、附属の紀伊・黒潮生命地域フィールドサイエンスセンターや練習船（勢水丸）での実習やインターンシップなどで、現場での体験を積むことにより広範な視野から生物資源をとらえられるようにする。

医学部医学科の前身は1944年に開校した三重県立医学専門学校である。第2次大戦後の1947年に三重県立医科大学となり、学制改革によって1952年には三重県立大学医学部に、さらに、1972年には国に移管されて三重大学医学部医学科となった。大学院の医学系研究科は1975年に博士課程が設置されている。

医学部看護学科は1948年に設置された県立医学専門学校の看護婦養成所が前身であり、1997年に4年制大学への移行を経て、三重大学医学部看護学科となった。





キャンパス風景

工学部は1969年に新たな学部として発足。機械工学科と電気工学科の2学科でスタートした。その後、工業化学科（1970年）、機械材料工学科（74年）、電子工学科（75年）、資源化学科（76年）、大学院工学研究科修士課程（78年）、建築学科（80年）、情報工学科（89年）、分子素材工学科（90年、工業化学科、資源化学科を統合・改変）、機械工学科（91年、機械工学科、機械材料工学科を統合・改変）、物理工学科（97年）など、学科の新設、統合・改組が続々に実施された。2019年にはこれら6学科を統合・改組して総合工学科（定員400名）を設置している。

工学部では、地域の活性化に貢献し、世界に通用する学問及び社会の進歩を支えること、ものづくりに不可欠な技術の修得と社会で活躍するための幅広い学識、工学的専門性、実践力や問題解決能力を有した人材を育成することを目的としている。

5番目の学部として人文学部が発足したのは1983年である。既成の学問分野を越えた学際的視野の下で、専門知識の教育を行うとともに、国際感覚の育成を目指す学部として、文化学科と社会科学科の2学科で発足した。このうち文化学科は1997年に改組して、世界諸地域の多様な文化・言語の研究に加えて、人類を取り巻く環境文化の探究を取り入れている（地域文化専修、言語文化専修、環境文化専修）。社会科学科は2005年に、法政コース、現代経済コースの2コース制に移行。2008年には、社会科学科の名称を法律経済学科に変更

している。



人文学部校舎

以上の5学部はそれぞれつながる大学院研究科があるが、これとは独立した形で2009年に発足したのが大学院地域イノベーション学研究科である。同研究科は、「企業との共同研究を通して実践的に研究開発とPM（プロジェクト・マネジメント）が同時に学べる日本初の大学院である」と謳っている。研究科長は、「実社会において、専門知識に基づき、自ら社会の課題を発見し、自分の頭で考え、信念を持って行動できる『プロジェクト・マネジメントができる研究開発系人材』と、『地域にゼロから1を創造できる社会起業家人材』を育てるための特徴ある教育を実施している」と述べている。

#### 特性生かす4 サテライト活動

キャンパスは、津市の北部、伊勢湾に面しており、すべての学部、大学院が1か所に集中している。大学は「知の拠点」として、学内外の組織との連携を深め、学部間の異分野横断的な取り組みや、自治体及び企業との産学官の地域連携プラットフォーム、国内外の高等教育機関との連携協定など、様々な知のつながりを通じて、ポストコロナ時代の教育研究活動を推進するとしている。さらにカーボンニュートラルなどの環境問題、デジタルトランスフォーメーションの推進をはじめとする諸問題を地域とともに探究し、その成果を還元して

地域の発展を導きたいとしている。

大学では、地域創生への取り組みとして2016年度から「地域拠点サテライト」による活動を始めた。県内全域を教育・研究フィールドと位置付けて、地元企業や自治体と大学をつなぐハブ機能として、地域特性を持つ四つの地域サテライトを展開している。具体的には、産学連携を目指す北勢サテライト、忍者研究などを行っている伊賀サテライト、海女研究・海洋生物研究の伊勢志摩サテライト、農林水産業や過疎地域の学校教育などに関わっている東紀州サテライトの四つで、各地域拠点では、各々のミッションを担って活動している。



国際環境教育センター

国際交流、留学、留学生との交流などに関する情報をまとめ、発信しているのが国際交流センターである。海外の大学との国際交流協定は25か国・地域、66大学・機関と結んでおり、学部間協定は24か国の49大学に上る（2021年4月現在）。外国人留学生数は27か国・地域から174名（うち女子77名）である（2021年5月現在）。

学生数は学部が男子3507名、女子2400名の計5907名、大学院が男子63名、女子46名の計109名。大学教員は751名である。

現在の学長は、伊藤正明氏である。三重大学医学部卒、医学博士。1990年三重大学医学

部付属病院助手、医学部教授、医学部付属病院長などを経て2021年4月から現職。専門は、内科学、循環器病学、血管生物学である。

日文：滝川 進

写真：三重大学 Facebook